

バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第131号 [2016年1月]

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8章22節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋
主の聖名を賛美します。バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第131号をお送りします。今回は久しぶりにルカの福音書の学びを進め、6章をスタートしました。今回のテーマは『安息日』です。

安息日は金曜の日没から始まり、土曜の日没に終了する。安息日はいかなる仕事をしてはいけない日とされており、今でもユダヤ人家庭では1000以上もの安息日の細則に従ってこの日を過ごす人は少なくない。この日の食事は金曜のお昼までに作り終え、食卓もセットしておく。食事に招待された客は、お土産に花束を持ち込む際にも「包装紙を破るといふ仕事をしてはならない」という細則をホスト側が順守できるよう、すぐ花瓶に挿せる状態で持ってくる。などなど。

安息日は神様が天地創造の業を6日で終え、7日目に休まれたことに端を発している。しかしこの「休みなさい」という神様からの恵みの決まりに関し、仕事とは何かという規定をつくって「これらを実施した者は罪人となる」と教えたのは律法学者たちだった。人々を神様のみ心にかなう者へと導くはずの律法学者たちは、次第に神様の視点からずれていき、今日のテキストでは安息日について主イエスと意見を異にして対峙し、ついに彼を殺害しようと決心する事態となる。

ある安息日、主イエスは弟子たちと話しながら麦畑を進み、弟子たちは麦の穂を手で摘んで揉んで食べていた。よほど空腹だったのだろうが、これは律法でも許されていた行為だった。ところがそこへファリサイ派の人々が現れて弟子たちが安息日にしてはならない事していると非難した。彼らは、弟子たちの行為が「麦の収穫作業」であり、安息日に禁じられている仕事をしたと言うのだ。これを聞いた主イエスの落胆した顔が目につく。

彼らに主は、サムエル記上21章のはじめに書かれている、空腹のダビデが逃亡中に祭司のもとに身を寄せ、祭司しか食べることができないはずの供えのパンを食べた件を語り、返事とする。何だかの外れな応答に聞こえる。

サウル王の忠臣であり、勇士として名を挙げたダビデは、王がある日突然心をひるがえしてダビデの命を狙うようになったため、着の身着のまま逃亡した。飢えで限界まで来たとき、そこに祭司アヒメレクが存在があり、彼に命乞いをした。そして本来は祭司しか食べることのできない供えのパン、つまり神からの下りもののパンをもらい受け、命をつなぐことができた。その後ダビデは力を得、逃亡生活から解放され、勝利の凱旋へと上りつめて行くというストーリーである。



この時、弟子たちは麦畑でつまみ食いしながらも主イエスの言葉に耳を傾けていた。つまり彼らは真の命のパンである、神様の言葉をいただいていたのだ。空腹のダビデがパンを求めたように、み言葉という命のパンを求め、それを受けて真の解放と真の力を得ることこそ、安息日にすべきであると、主イエスは仰りたかったのではないだろうか。つまり、このストーリーにこそ、安息日のあり方が示されているのだと気づきました。

主は、6日間社会の中で働いて心をすり減らした私たちに真の安らぎと力を得てほしいと切望し、そう招いておられる。

『わたしは命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない』
ヨハネによる福音書6章35節